

ド

イ

ツ

ト

ー

ヒ

新島先生とフィヒテ



私はドイツ観念論の哲学者、

J・G・フィヒテ（一七六二—一八一四）を研究していますが、ドイツ語でフィヒテとはもとロートタンネ（赤樅）の木、つまりドイツ唐櫨のことです。ドイツの森のほとんどはこのフィヒテに覆われ、また毎年クリスマスツリーとしても親しまれています。私もフィヒテの小さな苗を持って帰りますが、どうしても身の丈より大きくは育ちません。日本の気候風土に合わないのかと心を痛めておりました。

昨秋新島先生の「同志社大学設立之主意之骨案」（明治十五年）の中にフィヒテからの引用のあることを知りました。それは『ドイツ国民に告ぐ』の中の次の一文です。わがドイツ連邦をしていつか他邦に卓越せしむるもの必らず教育の力によるなるべし。これは日本におけるフィヒテ引用のうち最初期のものでしょう。

教育への情熱を介した新島先生とフィヒテとの深い関わりを知った翌日、私はクラーク館と待辰館との間に立つフィヒテの太木を発見しました。三十数年間同志社にいて初めて気がつきました。ひよつとしてドイツ旅行もしている新島先生お手植えのものかと思い、早速樹木医の東條広明氏に照会しましたところ、樹齢は七十七年ぐらいとのこと、またクラーク記念館、待辰館がそれぞれ明治二十七年、昭和三十三年に完成していることから新島先生のお手植えではなく、後年の移植なのでしょう。

長澤 邦彦

（大学文学部教授）